

診断された。LSG 分類では diffuse lymphoma, large cell type で従来の細網肉腫に分類されるものであった。進達度は ss で、リンパ節病巣はみられなかった。病期分類では Murphy 法の II 期であった。術後は良好に経過し、現在化学療法を施行中である。

27) 呼吸困難を呈した頸部上縦隔血管腫に
対し VCR が著効した小児例

山下 芳朗・清水 哲朗
新保 雅宏・柚木 透 (高山医科薬科大学)
増子 洋・唐木 芳昭 (第二外科)
田澤 賢次・藤巻 雅夫
村上 巧啓・岡田 敏夫 (同 小児科)

頸部上縦隔の腫瘤により気管の著しい圧排像を示し、吸期時の陥没呼吸を伴った5カ月の女児例に対し、確定診断のつかないまま神経原性腫瘍を疑って VCR を投与したところ著明な症状の軽減と腫瘤の縮小を認めた。摘出した腫瘤は組織学的に血管腫であり悪性所見はなかった。

縦隔に発生する血管腫は稀で治療法も種々である。今回たまたま VCR が著効したが、縦隔血管腫につき若干の文献的考察を加え報告した。

28) 神経芽腫 Stage IV-S 症例の検討

大沢 義弘・内山 昌則 (新潟大学附属病院)
広田 雅行・岩濑 貞 (小児外科)

一般に、小児腹部悪性固型腫瘍の中で、神経芽腫は最も予後不良であり、当然、その治療には強力な化学療法を主とする集学的治療を要することが多い。しかし、神経芽腫の中でも Stage IV-S と分類される一群は、骨髄、肝、皮膚へ遠隔転移を有するにも拘らず予後は良好で比較的軽度の治療により治癒することが多い。

当科で経験した Stage IV-S 症例は5例(男児4例)で、いずれも6ヶ月以内に発症し、治療により全例生存

している。肝への術前照射は2例(3200, 900R)に、手術は2例に生検を、3例に原発巣(副腎腫瘍)の切除を施行、術後化学療法は1年以内の James 療法を行った。

今回は、実際の症例を提示し、本症の問題点につき検討した。

29) 真性半陰陽の1例

新田 幸壽 (長岡赤十字病院)
小児外科
和田 寛治・田島 健三 (同 外科)
神谷 岳太郎
森下 英夫 (同 泌尿器科)
岩濑 貞 (新潟大学附属病院)
小児外科

患者は、昭和62年4月21日正常分娩にて男児として出生。在胎40週5日、生下時体重 3900g。第2子で、家族歴・妊娠経過に特記すべきこと無し。昭和62年5月20日両側停留睾丸として当科に紹介された。

両側小さな睾丸を鼠径管内に触知、外性器は男性型であったが極めて低形成であった。

昭和62年9月29日染色体検査、末梢血20細胞すべて46, XX, 正常女性核型であった。

昭和62年11月27日染色体検査再検し、100細胞中8細胞にY染色体を認めた。46, XX/46, XY モザイクであった。

尿道造影は完全に男性型。副腎皮質ホルモン、性腺ホルモンなど特に有為無し。

昭和63年2月17日試験開腹。卵巢、子宮なし。鼠径部の腫瘤は、肉眼的には左：睾丸、右：左に比し柔らかく一見腎臓様。迅速では左：睾丸、右：多分睾丸との診断。

右睾丸は卵巢睾丸の可能性も考えられたが、摘除せず両側睾丸固定術を行った。